

「感想を述べる」

【登場人物】

藤代健一（21）……大学3年生。国語教育「深山ゼミ」所属。

教員志望。深山教授に気に入られている。

八嶋恵美子（20）……大学3年生。「深山ゼミ」所属。教員志望。

おとなしい性格で、男子学生にかなりモテる。

本宮村美沙（22）……大学3年生。「深山ゼミ」所属。

以前いた大学を退学し、入り直したため年齢は藤代より上。

木田裕美香（29）……新聞記者。「深山ゼミ」の卒業生。深山教授に

書評インタビューの取材に来た。

決してど田舎ではないがかといつて垢抜けてもない中途半端な地方都市の国立大学。学生たちもその多くが地元で教員や公務員になることを希望している。

舞台は教育学部教員養成課程の国語教育「深山（みやま）研究室」。

教授の深山が開講する「深山ゼミ」の学生である、藤代と八嶋が読書感想文の下読みをしている。

藤代 （一枚めくり）おーい。またメロスかよ。

藤代、ろくに読まず別の束にその感想文をまとめる。

八嶋 藤代さん、それひよつとしてメロスの山ですか。

藤代 そう。こつちがマルでこつちがボツね。で、これがメロス。

八嶋 「走れメロス」だけ分けてるんですか。

藤代 うん。あとでまとめて読もうかと。

八嶋 どうしてです？

藤代 八嶋ちゃん、下読みマスターのこの私が大事なことを教えてあげよう。

八嶋 はい。

藤代 「走れメロス」に傑作なし。

八嶋 えーほんとですかあ？

藤代 ホントだって。見てみ。どいつもこいつも「いろいろ大変なことがあつたのにあきらめなかつたメロスはすごいと思いました」って

書いてあるから。

八嶋 はあ。

藤代 （数枚目を通す）ほらこれも。これも。これもそうでしょ？

八嶋 仕方ないんじゃないですか？だって結局そういう話なんですから。

藤代 そりゃそうなんだけどさ、でもちよつと考えればわかるじゃん。こんな誰でも書くようなこと書いたって賞なんかもらえないよ？っていうか審査員のとこすら行かないよ？

八嶋 まあ、中学生が下読みの存在を知ってるかどうかはともかくですけど。

藤代 第一、メロスなんかちつともすごくないよっあいつ走ってないんだ

から。

えっ？

八嶋 藤代 あ、知らない？名士屋かどつかの中学生が自由研究で調べたの。知りません。

八嶋 藤代 メロスが走った距離と時間を本文から類推して走行速度を計算したら、全力で走るどころか全然走ってなくて、いいとこ早歩きぐらいだったんだって。

八嶋 藤代 そうなんですか？

八嶋 藤代 だからさ。どうせいいのいないんだからメロスだけまとめといてあとで一気に読み飛ばす。

八嶋 藤代 読み飛ばす。

八嶋 藤代 読み飛ばす。一枚二秒。

八嶋 藤代 二秒って。

八嶋 藤代 まあ二秒は極端だけだし、そんならしいの気持ちじゃないと終わらないよこれ。

八嶋 藤代 そうですよねえ。

八嶋 藤代 そうじゃなくても結構かかると思うけど、時間大丈夫？

八嶋 藤代 大丈夫です。今日はバイトもないので。

八嶋 藤代 へーそうなんだ・・・

八嶋 藤代 なんですか？

八嶋 藤代 ううん。何でもない。

八嶋 藤代 軽く首をかしげるが、下読みに戻る。

八嶋 藤代 藤代、そんな八嶋をニコニコ眺めている。

八嶋 藤代 先輩？

八嶋 藤代 ん？なに？

八嶋 藤代 読まないんですか？

八嶋 藤代 あ、うん。読む。読むけど、ちよつといま休憩中。

八嶋 藤代 メロスの話からずつと休憩じゃないですか。ホントに終わらないですよ。

八嶋 藤代 もうちよつとだけだった。八嶋ちゃんここまで読んでいいのあった？

八嶋 藤代 そうですね・・・これとかよかったと思いますけど。

八嶋 藤代 イブセン「人形の家」？聞いたことないなあ。

八嶋 藤代 何言ってるんですか。こないだゼミで深山先生話してたじゃないですか。

藤代 そうだっけ？

八嶋 そうですよ。弁護士夫妻のノーラは夫に愛されているんだけど、その愛は彼女を一人の人間として尊重するのではなく、ペットをかわいがるような愛であって、それに気づいたノーラは最終的に家を出るんですよ。

藤代 ごめん八嶋ちゃん。はしよりすぎてちつともわかんない。  
八嶋 信じられないですよ。深山先生けっこう時間かけてしゃべってましたよ？

藤代 基本的に聞いているフリだから俺。

八嶋 えーマジですか。

藤代 うん。でもよかつたんでしょ？

八嶋 はい。

藤代 (原稿をちらりと見つつ) じゃあこっちのオッケーの山に入れとくね。

八嶋 はい。

藤代 しっかしこれ、冗談抜きで終わんないな。折橋君とかどうしたの？彼もやるって言ってたよね？

八嶋 部活じゃないですか？折橋君ハンドボールの国体強化選手ですし。

藤代 そうなの？

八嶋 だから多分練習か、ひよつとすると遠征とかかも。

藤代 へー(気のない返事)。

研究室の扉が開き、本宮村がやってくる。

八嶋 あーこんにちはー(手を振る)

本宮村 こんにちは。

藤代 ども。

本宮村 何やってるんですか？

藤代 あ、いや、別に。

八嶋 あれ？本宮村さん聞いてなかったんですか？

藤代 八嶋ちゃん。

八嶋 え？え？

藤代 いいから。

本宮村 何がですか？

八嶋 深山先生に頼まれて、読書感想文コンクールの下読みやつてるんですよ。

藤代 八嶋ちゃん！

八嶋 ？

本宮村 下読み？

八嶋 ええ。深山先生が読む前に、内容のいいのだけに絞っておくんです。先生、全部読まれないんですか？

本宮村 いや読みますよ。読むんですけどね。ある程度しっかり書いてるものを絞っておいた方が、よりじっくりと読んでもらえるじゃないですか。深山先生もお忙しい方ですし。

本宮村 でもそれって公になつてない話ですよ？

藤代 ええ、それはそうですね。でもこれは深山ゼミの伝統行事なんです。研究室だけでは生身の児童生徒と関わることができない、それじゃ何のための教員養成課程かって。せめて彼らの書いた文章にだけでも触れさせてあげたいっていう深山先生の親心で毎年ゼミ生が下読みをやらせてもらつてるんですよ。主催者側も了解してるんですから。ね？

八嶋 そうだったんですか。

藤代 そうだったんですよ。ははは。

本宮村 ……そういうことなら、私もお手伝いします。

藤代 えっえー？いいですよそんなそんな。本宮村さんのお手をわづらわせるようなことじゃないんですから。

本宮村 藤代さん。

藤代 はい。なんででしょう？

本宮村 前から言おうと思つてたんですけど、その、私に敬語使うのやめてもらつてもいいですか？

藤代 そんな。先輩じゃないですか。

本宮村 先輩じゃないですよ。年が上なだけでゼミでは藤代さんのほうが先輩ですから。

藤代 (小さく) だったら藤代先輩って呼ばよな。

本宮村 すいません。わかりました藤代先輩。

藤代 ちよつとやめてくださいよ。

八嶋 先輩。

藤代 だから先輩じゃないつてば。

八嶋 先輩じゃないですか。

藤代 あ、ああそうか。

本宮村 とにかく、ここでは藤代さんのほうが先輩ですからもつと普通にしてください。お願いします。

藤代 努力します。

本宮村 では私にも手伝わせてください。いいですよ？

藤代 ……

八嶋 いいじゃないですか。どっちも手が足りないところだったんですから。

本宮村 (八嶋に) そうなの？

八嶋 はい。折橋君ハンドボールなんで。

本宮村 ああ。

藤代 (しかたなく) じゃあ、この山を読んでもらって、一応いいやつとよくないやつに分けてください。

本宮村 どういう基準ですか？

藤代 そこは、なんていうか適当に。

本宮村 適当？

八嶋 えっと、ほら。適当っていうか、臨機応変っていうんですか？読んでみて、これは入賞しないんじゃないかなっていうのを私は分けるようにしています。(藤代に) そんな感じですよ？

藤代 ……うん。

八嶋 あんまり深く考えなくていいと思いますよ。あくまで下読みですし。わかりました。

八嶋 じゃ、やつちやいましょう。これだけあるんですもん、テキパキやんないと夜になっちゃいますよ。

本宮村 そうね。

藤代 俺はそれでもよかったんだけど。

本宮村 なんですか藤代さん

藤代 なんでもありません。読みまっしょう！レッツツリーディング！

三人、感想文を読んでいく。

それぞれ出来のいいものとそうでないものを分けながら。

藤代 八嶋ちゃん、これ全部読んだ？

八嶋 はい。一応読みましたけど。

藤代 で、こつちがオツケーのやつね。

八嶋 そうです。

藤代 りようかい。(本宮村に) 本宮村さんも、こつちがオツケーですよ。

本宮村 あ、逆です。こつちがオツケーです。

藤代 えーオツケー多いなあ。(数枚読む) あ、これとかこれ、ボツでよくないですか？

本宮村 なるべく多く選んであげたいんですよ。

藤代　それはわかりますけど、全部通しちやったら下読みの意味ないですからね。

本宮村　全部じゃないですよ。明らかにダメなのはチェックしてます。  
藤代　ふーん……

藤代、本宮村がボツにした作品を読む。

藤代　あの、本宮村さん。

本宮村　はい。

藤代　これ、何でダメなんですか？結構よく書けてると思いますけど。見せてもらっていいですか？（さっと読む）ああ、これですか。明らかにさっきのオツケーのやつよりいいですよ？

本宮村　そうなんですけど、ちよつとこれ見てください。

本宮村、ボツにした別の作品を数点見せる。

本宮村　ほらこれ。これも。絶対写してますよね。

藤代　あー……

八嶋　ですねえ。

本宮村　でしょ？微妙にちよこちよこ変えてるけど。

八嶋　芥川龍之介でも、羅生門でも蜘蛛の糸でもなくて「杜子春」ってとこがやらしいですよ。『ほくも最初は杜子春みたいにならなくて大金持ちになれたらいいと思いましたが、最後まで読んでみるとやっぱりお父さんやお母さん、家族たちと平凡でも幸せな生活ができるほうがいいと思いました。』っていかにもさわやか中学生って感じですよ。お前は中学生日記かよって。

藤代　八嶋ちゃん、言うねえ。

八嶋　いえいえ。

本宮村　というわけで、これとこれと、これはボツにしました。

藤代　んー……わかりました。じゃあ、こつちでもらいます。

本宮村　え？ボツでいいんですよね？

藤代　ええ、まあ。

本宮村　なにかあるんですか？

藤代　なんもないですよ？（八嶋に）あ、そしたら一回休憩しようか。先

八嶋　はまたまた長いしね。

藤代　えー大丈夫ですよ。がんばってやらないと終わらないでしょう？

八嶋　うんそうなんだけどさ。あの……俺ちよつと先に作業しときたい

ことあるから。(本宮村に) 終わったら呼ぶんでいったん休憩し  
といてください。

本宮村

作業ってなんですか。手伝いますよ。

八嶋

そうですね。一緒にやりましょう先輩。

藤代

いやいいって。

本宮村

はつきり言ってくださいよ藤代さん。作業あるんなら共有しましよ

う。

八嶋

ですよお。先輩。

藤代

……。

躊躇する藤代。しかし、口を開く。

藤代

本宮村さん。怒らないでくださいよ？

本宮村

なんで私が怒るんですか。

藤代

絶対怒るよ……

本宮村

言ってくれないとわかりませんよ。

藤代

……わかりました。言います。言いますが、あのこれ他言無用

ですからね？

八嶋

なんですか先輩。

藤代

あの。この東八坂中学校の生徒さんが書いたやつについては、基本

ボツにしない方向でお願いします。

本宮村

はい？

八嶋

どういうことですか？

藤代

東八坂中学って、深山先生の母校でね、いまでも年に何回か特別授

業しに行ってるんだよ。

本宮村

それと感想文とどう関係するんです？

藤代

だから。特別授業で感想文の書き方教えてるんですよ。深山先生が。

それで、そのこの中学の生徒は感想文バツチり書けるってことに、

なってるというか。

本宮村

全然意味がわからないんですが。

藤代

絶対よそで言わないでくださいよ。つまり、深山先生が教えにいつ

てる東八坂中学の生徒がおおむね毎年最優秀賞取ってるんですよ。

よ。このコンクール。

八嶋

もしかしてやらせてことですか？

藤代

違うって。今時そんなことできないの。審査員だって深山先生だけ

じゃなくって他にも何人かいるしね。だから、下読み段階で直し

ちやうわけよ。ここの生徒の分だけね。



八嶋 えー。

藤代 下読み段階はゼミ生しか読まないから、ここでいけそうなやつはガツツリ直すわけ。賞取れるようにね。で、そこまでじゃないやつもそこそこにしちゃうと。そうすれば本審査の時に深山先生の指導を受けた学校の生徒が書いた作品の割合が増えて、「さすが深山先生」ってことになる、と。

本宮村 ……不正じゃないですか。

藤代 まあ、そうですね。

本宮村 こんなのおかしいでしょ？第一、選ばれた子にしたって「自分の書いたのと違うなあ」ってことになるじゃないですか。

藤代 そこは向こうの先生がうまいこと言ってるんでしょ。だって毎年やっつてんですから。

本宮村 ひどい。

藤代 ですから本宮村さんいいですよ帰ってもらって。こういうの、絶対クライでしょ？

本宮村 そういう問題じゃないですよ。公のコンクールでこんな不正が行われていいわけじゃないですか。

藤代 そりゃよくはないですけど…でもしかたないじゃないですか。

藤代 そういうことになってるんですから。

本宮村 そういうことって何ですか。藤代さん恥ずかしくないんですか。

藤代 だから帰っていいって。

本宮村 だからそういうこと言ってるんじゃないんですね、

藤代 (キレて) うっさいなあ！わかってるよ言われなくたって。でも毎年やっつてんだって。しょうがないんだって。こういうもんなんだって。

本宮村 しょうがなくなるでしょう。中学生は真面目に書いてるんですよ？書いてませんよ。さつきも見たでしょ。コピペ。コピペですよ。メロスも杜子春もこのころも全部。あのね、俺去年もやりましたけど、完全オリジナルな感想文なんて本当に少ないんですよ。ネットから引つ張ってきたりあとがきやら解説から写したり。それ全部こつちがチエックしてんですよ？

本宮村 ……。

藤代 本宮村さんわかってますよね？自分が深山先生から嫌われてるってこと。

八嶋 (同情的な目で本宮村を見る) ……。

藤代 俺からしたら逆に考えられないですよ。大学の研究室で教授に逆らって何の得があるんですか。深山先生、地元の私学にもコネある

し、採用の時でも一言あるのとないのとじゃ全然違うんですよ。俺は、教員になるために大学通ってるんです。そのためにプラスになることなら俺はやりませう。

本宮村

私だって教員になりたいと思っっています。そのために前行ってた大学辞めてここに入り直したんですから。でも、教員ですよ？そういう不正を許さない姿勢が求められると思いませんか？

藤代

考え方の相違ですね。お互いに自分の考えに従って行動すればいいんじゃないですか。ただ、こっちの邪魔はしないでください。それでもいいですよ？

本宮村

藤代さん。

その時、研究室のドアがノックされる。返事がないので、もう一度ノックの音。

藤代

どうぞ。

新聞記者の木田裕美香が入ってくる。

木田

すいません。深山教授はいらっしゃいますか？

八嶋

いいえ、先生はいらっしゃいませんけど・・・どちら様ですか？

木田

私、東西新聞の木田と申します。四時にこちらで先生にインタビューをさせていただく予定になってたんですが。

八嶋

そうなんですか？特に何もおっしゃってなかったと思いますけど。

木田

えーどうしよう。

木田、携帯電話を取り出して深山にかける。

しかしつながらない。

木田

ダメか・・・。まいった・・・。

しばらく悩む木田。と、藤代が声を発する。

藤代

あ！ごめんなさい。僕聞いてました。

木田

え？

深山先生、何か急に大学本部の方で打ち合わせが入ったとかで、今日キャンセルしたいっておっしゃってました。記者の方の携帯番

号がわからないから、来たら丁寧にお詫びしてって言われてたんです。

本宮村 そうなんですか？

藤代 そうそう。(木田に) ごめんなさい。本当に申し訳ありません、とのことでした。

本宮村 (怪訝な視線で藤代を見る)

木田 ……そう。じゃあ、また出直します。(名刺を取り出し) 先生にお渡しいただけますか？

藤代 もちろんです。確かにお受け取りしました。

木田 みなさんは深山教授のゼミ生の方ですか？

藤代 はい、そうです。

木田 実は、私もそうなんですよ。

八嶋 えーホントですか？

木田 もう六、七年たちますけどね。

木田、カバンから本を出す。

それは深山教授が書いた「『お前』と呼ぶな、『こいつ』と『言うな』という本。

木田 ちなみに、これは読まれました？

藤代 もちろん。結構売れてるんですよ？

木田 そうですね。大学の先生が書かれた本としてはかなりいい方ですね。

八嶋 あ、それ私も買いました。

木田 「買いました」ってことは、読んでないね？

八嶋 読みましたよー。

藤代 八嶋ちゃん、またまた。

八嶋 えーホントに読みましたって。

木田 じゃあ、感想は？

八嶋 感想ですか？感想は……すいません。

木田 別に謝らなくても。(本宮村に) あなたは？

本宮村 私は読んでいません。

木田 あ……そう。

藤代 それで、今日は著者インタビューで。

木田 うん。やっと新聞記者として先生にお会いできると思ったんだけどな。

本宮村 この本、そんなに売れてるんですか。

木田 売れてるよ。ジェンダーとか女性論の本ってやたら難しいのとかヒ

ステリックな極論とかも多いんだけど、これは牛井屋さんで聞いた男女の会話とか身近な例も多くてわかりやすいのよ。

藤代 あ、それまさに「『お前』と呼ぶな、『こいつ』と言うな」の話ですよね。深山先生、牛井屋さんか絶対行かないと思うんだけどなあ。

木田 それ私も思った。

八嶋 (ぶざけて) ゴーストライターとかだったりして。

藤代 いやあ、それはないでしょ。

木田 そうね。うちの会社から出版してるけどそんな話聞かないもん。この業界も狭いからそういうのだったら絶対バレるしね。

本宮村 牛井屋さんの話ってどんな話なんですか？

木田 えっとね、深山先生が牛井屋さんで食べてたらカップルが入ってきただって。

本宮村 ええ。

木田、本をめくり、該当するページを読む。

木田 「どこにでもいるようなごく普通のカップルだったが、私が驚いたのは彼が注文をした時だ。彼は注文を取りに来た店員にこう言ったのだ。『俺、並ね。で、こいつ、水』。店の人も思わず注文を聞き直していたが、彼は同じ言葉を繰り返すだけであつた。」

本宮村 え、水ですか？

木田 そ。(読む)「さらに驚いたのは女の子もニコニコ笑って、男が牛井を食べるのをじっと待っていた、ということだ。彼は食事中なにかを話すわけでもなくただ黙々と食べ、彼女はそれを黙って見ている。そして驚きあきれられる私に気がつくこともなく当たり前のように店を出て行った。それからしばらく私が考え込んでしまつたことは言うまでもない。」

本宮村 ひどい。

木田 だよな。

本宮村 何ですかそれ。女を何だと思ってるんですかねその男。(八嶋に) そう思いませんか？

八嶋 うん・でもひよつとしたら女の子はおなか空いてなかったのかも。ダイエツト中とか。

本宮村 それにしたって、っていつかそれならなおさら男も我慢するべきじゃないですか。

八嶋 まあ、そうですね。

本宮村

八嶋さんってそういうの男性に許しちゃう感じですか？

藤代

ちよつと本宮村さん。それに、男だつてみんなこんなのじゃないつて。僕ならそんなことしないもん。

木田

ホント？

藤代

ホントですよ。こう見えて僕、女の子には優しいんですから。

本宮村

私、優しくしてもらつたことないですけど。

藤代

本宮村さん僕より強いですよ。それに年上だし。

本宮村

それ今関係ないじゃないですか。

木田

でも確かに面白いエピソードだね。(読む) 「現代社会において

『経済格差が広がる中、『持てる者』よりもむしろ『持たざる者』の方に他者を支配したいという所有欲求がより顕著であることは興味深い。』言つてゐることは今まで書いてたこととそう変わらな

いんだけど、牛井屋で並ひとつつてところが妙にリアルだもんね。なるほど。

藤代

本宮村

男が食べてる横で水だけ飲んでる子は「所有されている」つてこと

木田

そりやそうでしょ。だつて水だよ？

本宮村

確かに不愉快ですね。他人に所有されるなんて。

八嶋

でも・・・

本宮村

私、人間はどこまでも自由じゃないといけないと思ふんです。自由

木田

を失うつてことは「人間」じゃなく「奴隷」つてことでしょうか？

本宮村

奴隷？

自分の意志に関わらず誰かの思うままに動かされるつてことは本質的には奴隷といつしよじゃないですか。自分で考へて自分の意志を持つて自分の信念に従つて行動することが現代社会で「人間」であるための条件だと、私は思います。

藤代

どうしたんです？そんなにマジにならなくなつていいじゃないですか。たかが牛井でしょ？

本宮村

藤代先輩はもう少し考へた方がいいと思います。

藤代

ちよつと。失礼じゃないですか！

木田

(二人を制して) はいはい。(本宮村に) すごいね。なんか直球。

本宮村

そういうんじゃないんですけど。

木田

ごめん。本宮村さんだっけ？

本宮村

はい。

木田

別に茶化していつたわけじゃないのよ。そうじゃなくて・・・いい

本宮村

なつてホントに思つたの。

本宮村

・・・。

木田 (藤代に) ねえ、もうちよつとおじやましててもいいかな？大学の空気がどうか、なんか懐かしくて。

藤代 え？まあ、別にかまいませんけど、深山先生きつとまた戻られませんかよ？

木田 わかっている。たぶん、今日はすっぱかされるんじゃないかなあ。

藤代 そんな、戻って来られますよ。・・・何時かはちよつとわかんないですけど。

木田 ううん。私、学生時代嫌われてたから。先生に。

本宮村 (木田を見る)

木田 つていうか、最初はすごく気に入られてたんだけどね。四年の時に、教員採用試験受けるのやめてマスコミにしますって言ったら、めっちゃ怒られて、それからね。

八嶋 ああ、わかりますそれ。

木田 いーやわかんないと思うよ？もうそれはそれはすごいお怒りで、私ハタチ過ぎてあやうく人前で泣かされるかと思っただもん。

本宮村 パワハラですよそれ。

藤代 本宮村さん。

木田 いいのいいの。じゃあ、ちよつと社に電話してくるね。

木田、会社に連絡するため退室。

藤代 なんだあの人。

藤代、机の上の読書感想文を片付け始める。

藤代 八嶋ちゃん、そっちのまとめてこつちにちようだい。

八嶋 え？片付けるんですか？

藤代 マズイでしょ、やっぱ。

八嶋 あ、ああ。そうですね。

藤代 まったく。勘弁してほしいよね。

本宮村、感想文の束を手にする。

藤代 ちよつと。やめてくださいよ。

本宮村 私、あの人に全部話します。

藤代 は？

本宮村 読書感想文コンクールのこと。不正に審査が行われてるってことを

全部。

藤代 何言ってるんですか。

本宮村 (感想文を示し) こんなのおかしいでしょう？

藤代 それさつきも話したじゃないですか。こういうもんなんですって。

本宮村 知ってて黙ってるなんて私にはできません。

藤代 できませんってね・・・言っときますけどそんなことしたら大変なことになりますよ。

本宮村 わかっています。

藤代 あなたはそれで気が済むかもしれないけど、こっちは迷惑なんだよ。

本宮村 藤代さん、まるで奴隷じゃないですか。

藤代 あ？

本宮村 深山先生にただ従って。それじゃ奴隷じゃないですか。

藤代 いいよ俺は別に奴隷でもなんでも。

本宮村 本気で言ってるんですか。

藤代 本気だよ。だって実際に奴隷になる訳じゃないし。こたわり過ぎなんだよあんた。就職のために教授に いい顔するくらい誰だつてや

つてるでしょ。自由を奪われるとか売り渡すとかそんな話じゃないつて。今は深山先生についてた方がトクだからそうしてるだけで、就職したらその上司の言うこと聞くよ。当たり前じゃんそんなの。奴隷だなんだつていうならあんたの方がよっぽど奴隷だよ。周りのこと考え ないで自分は自分はつて。あんた自分自身の奴隷だよ。

本宮村 私は奴隷じゃありません！

藤代、無言で本宮村の腕をつかみ力任せにねじり上げる。

本宮村 ！

八嶋 藤代さん！

藤代 うっさいなあ。なんだかんだ言つたつて、こうすりや何もできないだろ？

藤代、さらに本宮村の腕をねじる。

本宮村 痛い！やめて！

藤代 「やめてください」だろ？「めんなさい」だろ？年食ってるくせ

に口の利き方知らねえのかよ。

八嶋 藤代さん！やめてください。

藤代 (無視して本宮村に) ほら、「ごめんなさい」は？あん？

本宮村、悔しそうに藤代をにらむ。  
藤代は構わず力を入れる。

本宮村 痛い痛い痛い！

藤代 「ごめんなさい」

本宮村 ……ごめん、なさい…

藤代 「許してください」

本宮村 ゆるして、くだ、さい。

藤代 (手を離す)

八嶋 本宮村さん！大丈夫ですか？

本宮村 (痛みと恐怖で何も言えない)

藤代 おい。お前わかっていると思うけどこのあと絶対余計なこと言うなよ。  
いいな？

本宮村 ……。

藤代 八嶋ちゃん、ごめんね。怖い思いさせて。俺ふだんは絶対こんなこ

としないんだよ？こいつがあんまり うざいからさ、ついカツとな

っちゃって。ホントごめんね？

八嶋 (小さく首を横に振る)

突然、本宮村が立ち上がり、泣きながら出て行く。

原稿用紙が散らばる。藤代はそれを拾いながら

藤代 おい！(舌打ち) まあいいか。変な気おこして余計なことしゃべら

れても困るし。あ、そうだ。これ終 わったら本当にとっかご飯で

もいかない？

八嶋 え…。

そこに木田が戻ってくる。

木田 どうしたの本宮村さん。

藤代 ああ、バイトか何か忘れてたみたいで。気にしないでください。

木田 でも、泣いてなかった？

藤代 えーそんなことないと思いますよ？

木田 ふうん。もう少し話したかったんだけどなあ。



木田、散らばった原稿用紙を見る。

木田 なにこれ。

藤代 ああ、何でもありません。課題って言うか・・・

木田 ひよっとして、読書感想文？

藤代 え。

木田 あれでしょ？コンクールの下読み。私たちのころもやってたもん。

八嶋 そうなんですか？

木田 うん。私はやったことないんだけど友だちで毎年やってた子とかはいたよ。結構いいバイトなんでしょ う？

藤代 いやいや。ノーギャラですよ？

木田 それはひどいなあ。

藤代 僕らは現場の中学生の文章に触れられるだけで勉強ですから。

木田 またまた。

藤代 ホントですよ。（八嶋に）ねえ？

八嶋 え？はい。そうです。

木田 へえー。ねえねえちよつと見せて。

八嶋 あ、あの。

木田、八嶋が持っている感想文を取って読む。

木田 「『杜子春』を読んで。」ふーん。おお、いいじゃないこれ。『ぼくも最初は杜子春みたいにならなで大金 持ちになれたらいいと思いましたが、最後まで読んでみるとやっぱりお父さんやお母さん、家族たちと 平凡でも幸せな生活ができるほうがいいと思えました。』なるほどねえ。でもちよつとマジメすぎる かな。なんかいかにもって感じだし。

藤代 まあ、そうですねえ。

藤代、笑いながら木田から感想文を取り上げる。

木田 いいじゃない、もうちよつと見せてよー。

藤代 個人情報ですから。

木田 そんな堅いこと言わないでさあ。

藤代 だからダメですってば。

八嶋 （不意に）あの。木田さん。  
木田 ん？

八嶋 聞いてほしいことがあります。

藤代 ちよつと、八嶋ちゃん？

八嶋 このコンクール、インチキなんです。

藤代 八嶋ちゃん！

木田 ……どういうことかな？

八嶋 私たち、下読みしながらズルしてるんです。

藤代 おいやめろつて。

八嶋 深山先生が特別講義で教えに行ってる学校があつて、

藤代 (強く) やめろつて！

藤代、八嶋の肩をつかむ。

体がこわばる八嶋。

木田 やめなさい。

藤代 なんでもないんですよ。インチキとかズルとか、そんなたいそうな

ことじゃ全然ないんです。ホント、ごめんなさい。(八嶋に)だよね？な？

八嶋 ……。

木田 もう遅いよ。コンクールに不正があるのよね？そこまで聞いて「なんでもない」じゃ通らないよ。

藤代 勘弁してくださいよ。この子、あんまりよくわかつてないんですよ。

ホントに不正とかそんなんじゃないかな。いんですから。

木田 なんでもないんだつたら話せるでしょ？何があるの？

藤代 ……。(八嶋に) 俺は何にもしやべつてないからね。話したきや勝手にしろよ。俺は関係ないから。

木田、ポケットからボイスレコーダを取り出し、スイッチを入れる。

木田 それじゃ、お願い。

八嶋 はい。

八嶋、藤代の視線をきしながらも、決意を持って話し始める。

八嶋 コンクールの作品はあらかじめ全部私たちが下読みをして、ある程度出来がいいものだけを深山先生に お渡しするんです。

木田 うん。それは知ってる。

八嶋 その時に、深山先生の母校で今も特別講義に行ってらっしゃる中学校があるんですけど、その中学校の生徒さんの分だけは学生が手直しをしてるんです。

藤代 (ため息)

木田 手直し？

八嶋 そうです。その中学の生徒さんが賞を取るように一部、手を入れるんです。

木田 そんなこと、毎年やってたの？

八嶋 私は今年初めて下読みに参加してるので・・・

木田 (藤代に) どうなの？

藤代 俺は何もしゃべりませんよ。

木田 ふーん、ずつとやってるんだ。

藤代 俺は何にも言ってますんからね。

木田 その態度でわかるわよ。

藤代 (背を向ける)

木田 それに本宮村さんが反対したわけね。

八嶋 ……はい。

木田 なるほどねえ。そういうことか。

八嶋 記事に、されるんですよね？

木田 あなたは、どうしてこのことを私に教えてくれたの？深山先生、絶対怒るよ？それはもう、私が怒られたところの騒ぎじゃないくらいカンカンになると思うよ。

八嶋 わかってます。

木田 そこまでしてどうして話す気になったの？

八嶋 ……私の話なんです。

木田 なにが？

八嶋 先生の本の、牛井屋さんの話。あれ、私が先生に話したんです。

藤代 え？

木田 そうなの？

八嶋 はい。二人で雑談してるときに私が見たことを話したんです。そしてら本に載ってます。

木田 それ、先生から何か相談とかされなかったの？「この話使っていいか」とか。

八嶋 ないです。でも私、別にそんなにたいしたことだと思っなくて。

藤代 まあ、著作権ってほどのことじゃないよね。

木田 でも一言あつてしかるべきでしょ。いくら自分のゼミ生だからっ

八嶋 て。  
私、なんにも考えてなかったなあって思って。大学だつてなんとな  
く自分の成績で入れる所だったつてだけで、藤代さんや本宮村さ  
んみたいに「教師になりたい」つてちゃんと考えてるわけでもな  
くて。

木田 うん。

八嶋 藤代さんのこともあいまいにしてて。  
ちよつとちよつと。

藤代 藤代さんの気持ちはわかってたんですけど、でも、付き合うとか  
八嶋 そういうのじゃないなあつて思つてたんです。でも、それはつき  
り言えなくて。

藤代 お、おお。

八嶋 藤代さん、本当にごめんなさい。

藤代 あの俺いま公開で振られてるわけですね。

八嶋 あ、すいません。

藤代 いいけど別に。

木田 なんか、青春だねえ。

八嶋 木田さん。私、もつとちゃんとしなくちゃつて、思つたんです。  
だから、

奴隷じゃなくて人間になりたいって？

木田 そこまでじゃないですけど、でも、そうです。

八嶋 ふーん。なるほどねえ。だけどさ、ちよつとテンション上がつ  
てるだけとかじゃない？実際に私がこの話を記事にしたら、深山  
先生だつて大変なことになるんだよ？大学にいられなくなるかも  
しれない。一人の人の人生変えちゃうことになるんだよ？その覚  
悟あるの？

藤代 そうだよ八嶋ちゃん。そんなヘビーな事、抱えることないつて。  
やめとこう。ね、そうしよう。(木田に) すいません。この通り  
ですから、今回の事、記事にするのやめてもらえませんか？お願  
いします！僕たちだつてこんなことやりたくてやつてるわけじゃ  
ないんです。それこそ先輩達のところからずつと受け継がれてきて  
たんですから。お願いします。

木田 ・・・うん、わかった。  
え？

木田 今回の事は記事にはしない。  
藤代 ホントですか。助かります。  
八嶋 どうしてですか？

木田 先生にはこれからも書いてもらわなきゃいけないからね。  
八嶋 そんな、不正ですよ？

木田 うん、そうだね。だけど私はオトナだから。これを記事にした場合とそうしなかった場合のどちらがトクかを考えて、よりいい方を選ぶだけ。今回は記事にしない方がトクだったってこと。

八嶋 ひどい。

木田 ひどくないよ。そういうものの、社会って。あなたも「ちゃん」と考える」ことにしたんだったらもっとよく考えなさい。勢いだけじゃ何も変わらないのよ。

藤代 そうだよ八嶋ちゃん。木田さんの言うとおりだつて。

木田 (藤代に) あなたは奴隷から早く抜け出すことね。

藤代 奴隷って。

木田 奴隷はね、自分から進んで奴隷になるの。考える事を放棄する方が楽だから。でしょ？

藤代 俺はそんなじゃありません。

木田 まあいいけど。じゃあ深山先生に伝えといてね。今度はドタキャンしないてくださいいねって。

藤代 ちよつと木田さん。

木田、藤代にボイスレコーダーを示す。

木田 今回は書かないけど、いつだって記事に出来るってこと。忘れな  
いでね。

藤代 ・・・はい。

木田 じゃあね。

木田、去る。

八嶋 行っちゃいましたね。

藤代 うん。

八嶋 ・・・すいませんでした。

藤代 ああ。いいよもう。

八嶋 すいません。

藤代 いいって。さ、やっちゃおう。夜までかかるよきつと。

八嶋 ・・・はい。

二人、感想文を読み始める。黙々と読む。

ややあつて、

八嶋 〇〇字じゃ、言えませんかね。

藤代 え？

八嶋 感想。

藤代 ……ああ（そういうことね）。

八嶋 不意に立ち上がる。

藤代 え、なに？

八嶋 私、帰ります。

藤代 なんで？

八嶋 ごめんなさい。

藤代 あ、食事とか誘わないから。

八嶋 （答えず帰り支度をする）

藤代 八嶋ちゃん。

藤代、八嶋を引き留めようと立ち上がる。

八嶋 くるりと背を向け走り出す。

藤代 えー…

一人残される藤代。

仕方なく、黙々と感想文を読む。

突然、藤代が原稿用紙を放り投げる。

宙を舞う原稿用紙。

泣きそうな、怒ったような顔で座っている藤代。

幕。